
罪と罰

ルーシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪と罰

【Nコード】
N1645B

【作者名】
ルーシュ

【あらすじ】
崩壊する世界で、僕はこの身に罪を背負った。

「本当に行くの？」

入り口の階段に足をかけたようにした時、サラが言った。

軽蔑も、悲嘆も、まして喜びでさえ、その言葉には含まれていなかった。

「何度も言うけど、僕はここに残るつもりは無いよ。ただ死ぬのを待つだけの運命なんて、僕には耐えられない」

「死ぬと決まったわけではないでしょう。助かるかもしれない」

「どっちにしろ、もうこの星が壊れてしまったことに変わりはないんだ。人工的に生かされるか、あるいはワクチンが開発されるか。色々な生きる可能性はあるけど、こんな腐った星では、どっちにしても人間的生活は望めない」

「そうだ。もうこの星は、どうやったって助かるはずはない。だから僕は、行くしかないんだ。」

「へえ。まるであなたが行くところは、素晴らしい生活ができるみたいね。羨ましいわ」

「違う。そんなわけない。だって僕が行くところは……………」

「分かっててそういう事を言うなんて、やっぱり君はひどい人だね」
サラに向かって怒鳴ろうかと思っただけ、やめた。

たぶん今の彼女に何を言っても無駄だ。それに、言ってしまうと惨めになるのは自分だから。

これ以上決心が揺らげば、たぶん今度こそ、僕はどこにも行けなくなってしまうから。

「今から大犯罪者になるあなたに、ひどいなんて言われたくはないわ」

彼女は相変わらず無表情のまま、ただ述べる。

「僕は星を出す許可をもらってる。犯罪者とは言わないよ」

「うつん、そういう意味じゃないわ。あなたの罪はね、星を出すこ

とじゃなく

殺人よ」

僕は彼女の言った意味が分からなかった。だってサラは分かっているはずだ。僕が誰よりも『死』を恐がることを。

人が死ぬのを見るのが嫌だから星を出るのに、僕が人を殺すはずが無い。

「あなたは、この星の全世界の人々を殺すのよ。今この瞬間にいる、全人類を」

もちろん、私を含めて。

そう彼女は言うが、僕はますます分からない。

「できるはずないだろ。それに僕は人が『死』ぬのは大嫌いなんだ。だからこそ」

「だからこそ、そうやって自分が見えない所で皆を消そうとするんでしょう？」

彼女は少し怒ったようだった。

「あなたがこの星に戻るときは何年後？ 五十年？ 百年？ 宇宙では時間の進み方が違うから、あなたが一年行っていただけで、こっちはそれ以上が経過する。あなたが帰ってきたとき、私たちの誰が残っているというの？」

彼女の口からは雪崩のように言葉が出てくるのに、僕からは何も出てこない。

「世界中の人間を殺すのと、自分だけが違う世界に行くのとは、何も変わらないわ。だってどちらも、その世界ではあなたと私たちは共存してないんだもの。それに、きっとあなたは百年しても戻ってこない。あなたが望むような世界になるには、きっと途方も無い時間がかかるから。あなたにとってはたいした時間でなくても、その頃には、今いる人々は誰一人として生きてはいない」

「……………ごめん」

僕は、謝ることしかできなかった。それさえ満足にできなかったけれど。

「そう思うなら一緒にいてよ。長くは生きられなくても、私は最後まであなたと生きたい」

「それは……………嫌だ」

「どうして！？ 私を愛してるって」

「言ったださ。もちろんそれは本当だ。だけど、だからこそ、嫌だ。僕は、最愛の人の死を見るなんて考えられない」

彼女の口が動きを止めた。

「僕は本当に臆病者だ。人が死ぬのを見たくなくて、どうせ死ぬならと、自分の目に写らない所で皆殺しにしようとする。そう、君でさえも。僕は『死』が恐いんじゃないかって、それを見るのが嫌なだけなんだろうな」

これこそ、究極のわがままだ。

僕は内心でそう思い、そして笑った。何も面白くは無かったけれど。

せめて彼女が最後に見た恋人の顔が、笑顔として残るように。

「それじゃ、僕は行くよ。これ以上ここにいと、離れられなくなる」

僕は階段をのぼりきり、中に入ろうとする。

「じゃあ最後に一つだけ聞かせて！！」

振り向くと、彼女が思い詰めたように叫んでいた。

「自殺という手は無かったの？ 皆と同じように、あなたもここで死ぬことはできなかったの？ 死を見るのが恐いんだったら、そうすればいいじゃない！！ そうすれば、少なくともあなたの骸はここに残るわ！ 私は、あなたが死んだ後でもあなたを見ることができる！なのに、それすらも許されないの！？」

彼女が涙を流した。

ああ、罪深い男だ、僕は。

最後まで、彼女を笑わせてあげられなかった。
その上、泣かせてしまった。

これは僕が犯した罪の罰だろうか。
分からない。

でも、

「その骸を見ても、君は生きていられるのかい？」

僕はそれでも止まらなかった。

それだけ言って、彼女を振り返りもせず、一目散に操縦席に座る。

ああ、僕は果たして笑顔でいられただろうか。彼女と、笑って別れられただろうか。

せめて、彼女の記憶に写る僕が、いつまでも笑顔でいられますように。

僕は、ロケットを発進させた。

× × ×

あれじゃあ、僕が彼女を想って自殺しなかったみたいじゃないか、
と今更ながらに思う。

それは決して嘘じゃない。彼女が僕の骸を見て後追い自殺をはかろうとするのは、目に見えていたから。けど、本当でもない。

僕はどこまでもずるい男だ。

そしてわがままな男だ。

だから自殺しなかったのも、たぶん自分のせいなのだ。

僕は『死』が怖い。人が死ぬのが。そして 自分が死ぬのでさえ。

つまり僕は、死にたくなかったから、自分以外を殺したのだ。
共存できないことがわかっていたから。

どちらかが、死なねばならなかったから。

しかし、彼女がこんなことを言っていたのを思い出す。

『 世界中の人間を殺すのと、自分だけが違う世界に行くの

とは、何も変わらない。どちらも、その世界では共存してないから

」

だったら、例えば自殺をしても変わらないじゃないか。自殺をすれば『死』の世界に行き、生きている人とは永遠にまじわらない。それは結局、今の自分と変わらない。

いや、もしかすると、僕以上の犯罪者だろう。だって僕は世界中の人を殺したけど、自殺すれば『自分』さえも殺してしまうのだから。

彼女はあれからどうしただろうか。

寿命をまっとうしたのか。それとも、ウイルスにおかされたか。

彼女の『死』を見なくていいのは良かったが、彼女がどうやって死んだか分からないのは残念だ。

願わくば、彼女が自殺をしなかった事を望む。

犯罪者になるのは僕だけで十分だ。その罪を背負うのも。

僕は丘にあがり、そこに腰をおろした。

そして景色を眺める。

人などいるはずのない、荒廃した大地を。

そして感じる。

自分の罪の重さを。

「これが、望んだ世界、か」

声は風に乗リ、どこまでも流れていく。しかし残念なことに、この星にはその声を受け取る者は誰一人としていない。

そして僕は立ち上がった。この星の千年を殺した責任を果たすために。

たった一人で、生きていくために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1645b/>

罪と罰

2010年10月17日20時08分発行